

## 『源氏物語』 丁子吹き料紙本「宿木」の性格

—— 架蔵、伝源三位頼政筆六半切の紹介を兼ねて ——

池 尾 和 也

### はじめに

本誌にて架蔵資料の紹介を掲載させていたゞいているが、今回はツレとなる資料が多いため、独立した一編とした。鎌倉期書写の源氏物語切については、手元に別本系統に属するものに限定しても数葉あり、ほかにも源氏物語絵巻詞書切・源氏歌集切・源氏物語古系図切などの鎌倉期書写の古筆切が存しており、紹介する機会を俟つところである。本稿の主旨は、所蔵する古筆切資料の中から紹介するに足ると思われるものを選んでその図版を提供することにあり、その目的に沿えば正確な書誌的情報を記せば充分であるが、<sup>〔1〕</sup>私に拙い論考を付け加えさせていたゞいた。見及ばない資料や論考の見落とし、失考などもあるかと思われるので、広く批正を請いたい。



伝源三位頼政筆六半切（源氏物語・宿木）

# 1、架蔵、伝源三位頼政筆六半切（源氏物語・宿木）

軸装の一葉（図版参照）で、簡便なかぶせ蓋の紙箱（上蓋・白地に金の武威野風模様〔薄は描かない〕、三四・〇×七・五×六・二cm、上蓋高五・八cm）に収められている。上蓋底に寸法・筆者・画材・備考を記す紙片（洋紙、四・三×五・七cm）を貼り、筆者欄に「頼政」と記す。同梱された極札（楮紙、一二・一×二・〇cm）には、

源三位頼政卿きたるも

とある（切初めの四字は「きたるに」であるが、鑑定者は「きたるも」と読み誤っている）が、裏書や極印はなく、鑑定者は未詳。表具は大和装（本紙台紙貼）で、さほど古びを感じさせない近時の仕立<sup>2)</sup>。白紙の押し風帯。一文字は臙脂地に入子菱の地模様で五三桐と十六弁八重表菊を交互に配する金欄、中廻しは金地に灰青の色糸で紋様を織り出した金欄で、蔓先に金糸で小花（雌藥は灰青）を配した牡丹唐草紋と鳳凰と雄藥に金糸を用いた牡丹唐草紋を縦に交互に配している。上下は利休鼠の紗。本紙を囲む内縁には鮮やかな緋色の紗を用い、さらに薄青色の和紙で覆輪を施しており、本紙にも金紙覆輪がある。軸先は磁製、網手模様の藍染付で、形はすぐ切<sup>3)</sup>。簡便な仕様の押し風帯であるのに本紙には覆輪付の内縁を施すなど、様式的にも破綻があり、あまり品のよい仕立とは言えないものである。

本紙の料紙は薄様の斐紙で、一五・五×一五・一cm。裏写りが認められる。元は升型に近い（綴じ目の部分を嫌って右側が少し裁断されていると思われる）六半形の冊子本と推定される。淡墨の細筆で、美しく流麗な線質は相当の筆力を感じさせ（拡大して筆の動きを追ってみると、一字一字の線の美しさやちよつとしたニュアンスの付け方<sup>4)</sup>筆の返しや止めの絶妙さなど、その能書振りが堪能できる）、本切だけを見ていると、書写年代は一見して鎌倉初<sup>5)</sup>前期頃と見紛うが、僚卷の写本・残欠本等を勘考すると鎌倉中期頃と推定される。

本切に關しては、既に多くの写本や零本、断簡の存在が報告されており、<sup>(4)</sup>右にその伝存状況を一覽しておく(各項目頭の算用数字は、『源氏物語』の巻次を示す。極札等のわかるものは「」内に示し、寸法・料紙等の書誌情報は各所収文献の解説や論文に依つた↓本稿の論述対象である「宿木」には、末尾に『源氏物語大成』<sup>(5)</sup>〔以下、「大成」と略記〕所収頁〔漢数字〕・行〔算用数字〕、『源氏物語別本集成』<sup>(6)</sup>〔以下、「別本集成」と略記〕文節番号を記した)、

12 ハーバード大学美術館蔵「須磨(すま九)」完本〔慈鎮和尚すま巻二冊〔守村(墨印)〕〕、一六・四×一五・五cm、料紙記載ナシ・装飾料紙あり、列帖装一帖〔六紙一括・四括、墨付六三丁〔六三ウ白紙〕〕、一面一〇行・歌一字下げ十地文続き)

33 相愛大学春曙文庫蔵「藤裏葉」<sup>(8)</sup>零本〔伝称筆者不明、一六・六×一五・六cm、斐紙〔裏写り少あり〕・装飾料紙あり、一二丁、一面一〇行・歌二字下げ十地文続き〕

38 国立歴史民俗博物館蔵中山本〔すゝむし廿二内〕鈴虫<sup>(9)</sup>残欠本〔すゝむし 為家卿〕〔包み紙〕、一六・五×一六・一cm、斐紙〔裏写り少あり〕・装飾料紙あり、列帖装一帖〔二括、一一丁(遊紙二丁を含む)、一一丁(後に遊紙三丁を含む)、一九ウ末紙片添付〔墨付十八枚〕〕↓一面一〇行・歌二字下げ十地文続き)

45 相愛大学春曙文庫蔵「橋姫(はしひめ)」零本〔伝称筆者不明、一六・八×一五・六cm、斐紙〔裏写りあり〕・装飾料紙あり、二〇丁、一面一〇行・歌二字下げ十地文続き〕

48 石水博物館蔵「早蕨(さわらひ宇四)」<sup>(10)</sup>残欠本〔源三位頼政卿やふしわかねは〔守村(墨印)〕〕〔古筆分家十三代了仲極札〕、一六・四×一五・七cm、斐紙・装飾料紙あり、列帖装一帖〔三括〕、墨付二二丁〔墨付五丁分落丁アリ〕、一面一〇行・歌一字下げ十地文続き)

49 宮内庁保管古筆手鑑所収「宿木」断簡一葉〔古筆学大成〕第二十三卷<sup>(11)</sup>・図版174、伝阿仏尼筆、浅井不旧極札、

一六・一×一五・五cm、鳥の子、一面一〇行↓一七四二・七〜12／別本集成 495051〜495093)

49 鶴見大学図書館蔵「宿木」断簡一葉〔「為家」〔紙背〕、一五・九×一五・三cm、斐楮混漉、一面一〇行↓大成  
一七四四・3〜8／別本集成 495261〜495302)

49 架蔵「宿木」断簡一葉（詳細前掲参照↓大成一七四五13〜一七四六4／別本集成 495464〜495506)

49 相愛大学春曙文庫蔵「宿木（やどりぎ）」零本（伝称筆者不明、一六・二×一五・六cm、斐紙〔裏写りあり〕・装  
飾料紙あり、一二丁、一面一〇行・歌二字下げ二行書+独立↓大成一七六四3〜一七七二7／別本集成 497682  
〜498658)

52 ハーバード大学美術館蔵「蜻蛉（かけるふ字八）」完本（「慈鎮和尚かけるふ卷二冊〔守村（墨印）〕」一六・四×  
一五・五cm、料紙記載ナシ・裝飾料紙あり、列帖装一帖〔六紙一括・四括、墨付六七丁〕、一面一〇行、歌一字下  
げ+地文続き)

53 相愛大学春曙文庫蔵「手習（てならひ）」零本（伝称筆者不明、一六・六×一五cm、斐紙〔裏写りあり〕、一二丁、  
一面一〇行・歌一字下げ+地文続き)

となる。たゞし、これらが僚卷乃至ツレと認定されるのは、その筆跡や書式・料紙寸法の一致ということよりも、そ  
の料紙の内に墨流し下絵や丁子吹き型抜き模様を有するものが含まれるという、かなり特殊な事情によるものである。  
田中重太郎博士旧蔵で相愛大学春曙文庫に現蔵される「ははきぎ」を含む全五帖の「断簡」（残卷Ⅱ零本）の複製本に  
付された博士の「解説」に依ると「筆者は、すくなくとも五名以上」とされており、おそらく各帖別筆と見ておられ  
ることがわかる。「ははきぎ」は、他の四帖やその僚卷とおなじく一面十行書で、和歌は二字程度下げて書き始め、上  
句・下句を分けることなく改行し、そのまま地の文に続ける（「宿木」以外は同じ）が、墨流し下絵や丁子吹き型抜き

模様料紙が現存丁には認められないので、一連のツレには認定されていない。これを除いた他の僚巻については、「各帖の筆跡は、類筆ではあるが一筆ではなく、複数手による寄り合い書きとなつてゐる」ことが指摘されており、なによりも「同じ型による丁子吹き装飾料紙が用いられていたがために、筆蹟や書式に異なる点があつても、僚巻なりツレなりである、と推断し得た」ことに加えて、「其紙の原表紙に外題をも備えたまま」の完本が四帖も存したという幸運もあつて、筆跡や書式の違いという、本来僚巻Ⅱツレとは認定しにくい条件を持つにもかゝらず、一具の寄合書の『源氏物語』として認定されるに至つてゐる。<sup>(14)</sup>寸法も普通の六半形であり、筆跡や書式による見当を付けられないという条件下では、現存巻以外のツレを目にしていたとしても、それが素紙の部分であれば目をすり抜けざるを得ず、ツレとして認定するためには、取り敢えず同じ装飾料紙のものを見出すことが先決となる（以下、これら全体を指す場合には、個々の断簡も含めて「丁子吹き料紙本」と呼称する）。

『増補新撰古筆名葉集』<sup>(15)</sup>「源三位頼政卿」条には「六半 源氏」とある切が登録されるが、判型以外に料紙についての記載がなく、特徴的な料紙を使用する当該切に該当するものとは思われない。『古筆学大成』第二十三卷には六半切二葉（図版113・114。二葉はツレで、ともに「総合」）、『源氏物語断簡集成』にも六半切を裁断したと思われる一葉（第一図↓「古筆学大成」所収切とは別筆、「浮舟」<sup>(16)</sup>）が伝源頼政筆として採録されるが、現時点ではそれ〴〵確認される残存枚数が少ないので、この「六半 源氏」に該当する切がどれにあたるのかは判断できない。ツレを含めると、伝称筆者を「慈円」「阿仏尼」「為家」とするものがあり、同じく『増補新撰古筆名葉集』「阿仏尼」条には「六半 砂子昏源氏コノ外類切多シ」、同「慈鎮和尚」条には「六半 源氏ノ哥」という記述が見出せるが、どちらも該当しないようである（丁子吹き料紙を「砂子昏」と見誤つた可能性はあるものゝ、今のところ否定的に取り扱つておく）。

本紙を翻刻しておく。

きたるに色はいよ／＼しろくなりてあ  
てにをかしけなりかゝる御うつりかな  
とのいちしるからぬをりたにあい行つ  
きらうたき所などの猶人にはおほくま  
さりておほさるゝまゝにこれをはらか  
らなどにてはあらぬ人のけちかくいひか  
よひてことにふれつゝをのつからこゑ  
けはいなともきゝみなれんはいかゝは  
たゝにも思はんかならずしかおほえぬへき  
ことなるをと我いとくまなき御心な

となる。書写内容は、『源氏物語』「宿木」巻で、宇治の中君は、夫の匂宮が夕霧の娘六の君と結婚後、夜離れが続き、その歎きを薫君に相談する内に、つい薫を簾中に通してしまい、そうして二人の間に恋情が生じて「添ひ臥し」するような関係となる中で、匂宮は久しぶりに中君を見舞う。六の君との婚儀やその後のことに忙しく、すっかり訪ねずにいた中君に逢ってみると、以前にも増して魅力的になつていたので、これも自分の愛情のなせる業と満足するが、独特の残り香によつて自分の留守に薫が訪ねてきていたことに気づくという場面であり、その後、二人の関係に疑いを持つた匂宮は証拠となる手紙などを探すが、隠しめせず他の手紙などに混じつて置かれていた薫からの便りは生真

面目そうな挨拶ばかりで、「こんなはずはあるまい」と匂宮は心穏やかでない。この場面の結びに置かれた「ことわりなりかし」は女房視点の地の文で、放つたらかしにしておきながら、きれいになった妻に嫉妬する匂宮を、皮肉な思いで眺めてる。この匂宮の自己中心的で滑稽な有り様は第二部の光源氏の姿そのものであり、薫という別の視点が導入されることで、光源氏⇄匂宮は相対化され、それに向けられた批判的な眼差しもくつきりと顕在化する。何故「宇治十帖」の世界が描かれなければならなかったか、その必然性の一端が垣間見えてくるようなシーンとなっている。

本切の諸本との異同状況や本文系統については、ツレの断簡や零本を含めて、次章において纏めて検討したい。

## 2、『源氏物語』丁子吹き料紙本「宿木」について

丁子吹き料紙本「宿木」は、前掲の残存状況にあり、本切を含めて零本十二丁分と断簡三葉が確認される。丁数にして一三丁半、古筆切の紙数に換算すると二十七葉分が得られることになる(以下、丁子吹き料紙本「宿木」と呼称するが、丁子吹き料紙本全体ではなく、本稿の対象である「宿木」のみを指す場合でも、「丁子吹き料紙本」の名称を用いる場合がある)。「宿木」は、同じ舛形本で一面十一行書の日本大学蔵伝光嚴院筆本では墨付一〇六丁半、一面十行書の陽明文庫蔵本(以下、「陽明文庫本」と呼称)では一四八丁を要しており、当該本は一面十行書であるところから、陽明文庫本に近しい丁数を有していたものと考ええると、残存する一三丁半は全体の約九・一二%にあたる分量と予想される(より正確な数値という点では、別本集成の文節数で合計1105文節となり、「宿木」全体の12596文節に比して約一〇・四三%となる)。これらを対象として、異同状況を見ておきたいが、既に僚巻では陽明文庫本との近親性が指摘されており、当該「宿木」もそのような可能性が高いものと予想されるので、陽明文庫本を底本とする「別本



集成」をそのまま利用するのではなく、より陽明文庫本との関連が明瞭に見渡せるように、敢えて大島本を底本として俯瞰を試みることにする。<sup>(20)</sup> 対象とする切・零本の量が多いので、すべての有意の異同を扱うことは難しく、対象を底本とする大島本と丁子吹き料紙本・陽明文庫本の間で異同の存する箇所限定した。校異符号等は「別本集成」に準じたが、より直感的な異同の把握のしやすさを考慮して、本文に傍書する形とした。<sup>(21)</sup> 校異に使用した諸本は、「別本集成」『河内本源氏物語校異集成』(以下、「河内本集成」と略称) 所収の諸本については、各本の校異略号を用いたが、「河内本集成」が中京大学図書館蔵大島河内本に「大」をあててため、大島本(古代学協会蔵)については「古」とした。「河内本集成」の異同は、同書によって確実に表記が確定するもの以外は「」に入れて示し、「[河]」は河内本諸本共通の異同であることを示す。「尾」と「[河]」に表記上の小異(漢字仮名の別や仮名表記(ワ行音・ア行音表記の違い等))が存する場合には、「尾」を除く諸本を一々掲示した。両書に未収録で「大成」に対校本として用いられる諸本中、横山本・肖柏本・桃園文庫本については「大成」に依った。物語の順序にしたがって、「古筆学大成」図版174を①、鶴見大学図書館蔵切を②、架蔵切を③、相愛大学春曙文庫蔵零本は一丁オモテウ一二丁ウラの各一面を一葉と見做して④く⑦とし、各丸付き数字の下に算用数字で行を示した。異同は原則として「別本集成」の用いる文節を単位としたが、異同の様態が理解し易いように複数文節に亘るものを一つに纏めた場合がある。表中、◎は底本に対して丁子吹き料紙本・陽明文庫本に共通の異同を有するものを示し、○は丁子吹き料紙本・陽明文庫本ともに異同があるが、その異同が一致しないもの、△は丁子吹き料紙本に異同はあるが、陽明文庫本は底本と一致するもの、×は陽明文庫本に異同はあるが、丁子吹き料紙本が底本に一致するものを示し、底本と丁子吹き料紙本・陽明文庫本に異同はあるが、音便・ミセケチ・補入・傍書・虫損などによって異同と扱われるものについては、記号頭に※を付して掲出した(一方に異同があり、他方に※に相当する異同がある場合には、(※)を付した)。なお、大島本にミセケチ・

補入・傍書等が存する場合、訂正後の本文と丁子吹き料紙本・陽明文庫本に異同が認められないものについては、異同としては掲出しなかった。◎〽×の前に付した●は、当該異同が丁子吹き料紙本・陽明文庫本にのみ共通することを示し、▲は丁子吹き料紙本の異同が孤立する〓独自異文になるもの、▼は陽明文庫本が独自異文となるものを示す（したがって、▲▼は両者に各々独自異文が存することになる）。

◇宮内庁保管古筆手鑑所収阿仏尼切〔一七四二七〽12／別本集成495051～495093〕

①2●◎よろつにそ（古保国高三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕）―よろつに（①陽）・方にそ（阿）

①2〽3◎おもひめくらされ（古〔横肖桃〕〔河〕）―思めくらかされ（①）・おもひめくらかされ（陽保）・思くらされ（阿）・思めくらされ（国高穂飯池日）・思ひめくらされ（三氏光）

①4×わたらせ給ぬなど（古①高三穂飯池日光〔横肖桃〕〔七平鳳大伏岩〕）―わたりたまひぬなど（保）・わたらせ給ぬに（陽）・わたらせ給ぬると（阿）・わたらせたまひけると（御）・わたらせ給はぬなど（国）・わたらせたまひぬなど（尾氏）

①7◎成にけるは（古）―なりにければ（①陽保阿〔御七平鳳大伏岩〕）・なりにけるは（尾）・成にけるは（国光〔横肖桃〕）・なりにけるは（高三穂飯池日氏）

①9●◎なにかは（古保国高阿三穂飯池日光〔横肖桃〕〔河〕）―なにか（①陽）・なには、（氏）

◇鶴見大学図書館蔵伝藤原為家切〔大成一七四四3〽8／別本集成495261～495302〕

②2※△もてはなれぬ（古陽保国高阿三穂日氏光〔横肖桃〕〔河〕）―もてなれぬ（②）・もてくなれぬ（飯）・ナシ（池）―もてはなれぬ事にしあれはいはんかた〔ナシ〕

②3 ▲△わりなくて (古陽保国高阿三穂池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — かなしくて (②)

②4 ●◎おほしたるを (古国高阿穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — おほしたるに (②陽)・おほいたるを (保三)・

②7 ◎さはきけり (古国高阿三穂飯池日氏光〔横桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) — さはきにけり (②陽)・さはきけり (尾)・

さわきにけり (保)・さはきける (肖)

②8 (●)◎ひとへの御そなども (古国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — 御そなども (②陽)・御そなども

(保)

②9 ●◎心よりほかにそ (古保阿三飯池日光〔横肖桃〕〔河〕) — 思のほかにそ (②)・おもひのほかにそ (陽)・心

より外に (国)・こゝろよりほかに (高)・こゝろよりほかにそ (氏)・心よりほかにて (穂)

◇架蔵伝源三位頼政切〔大成一七四五13〕一七四六4 / 別本集成 495464 ~ 495506〕

③4 ×人には (古③国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — 一人に (陽保) ↓大成・保に異同記載ナシ

③5 ●◎おほさるゝまゝには (古国高阿穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — ナシ (保)・おほさるゝまゝに (③陽) ↓

大成・陽に異同記載ナシ

③5 5 6 ●◎はらからなとはあらぬ (古国高三穂飯池日氏光〔横肖桃〕) — はらからなとにてはあらぬ (③陽)・

はらからなとならぬ (保)・はらからなともあらぬ (阿〔御七平鳳大伏岩〕)・はらからなとはあらぬ (尾)

③8 ●◎けはひをも (古保国阿飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — けはいなども (③陽)・気はひをも (高三)・けはひ

おも (穂)

③8 ●◎いかてか (古保国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — いかゝは (③陽)

③9 ◎おほしぬへき (古) — おほえぬへき (③陽保国高阿尾穂飯池日氏光〔横〕)・思ひよりぬへき (三)・おもひよ

りぬき(桃)・おもひぬへき(肖)

③ 10×ことなるをと(古③保国高阿日氏尾〔肖桃〕〔七平鳳大伏〕―となるを(陽)・ことなるを(岩穂)・事なるを(飯池〔横〕)・ことなるおと(光)・ことなをと(御)・事なるをと(三)

◇相愛大学春曙文庫蔵「宿木」零本〔大成一七六四3〜一七七二7〕別本集成 497682〜498658〕

〈二丁オモチ〉〔大成一七六四3〜9〕別本集成 497682〜497720〕

④ 1※×ふみわけゝる(古保国高三氏光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏〕―ふみわけ△る(陽)・ふみわけたる(阿飯)・わけゝる(岩)・ふみわけける(④尾穂池日)

④ 1〜2●◎見わたして(古国阿穂飯池日〔肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―みいたして(④陽)・みわして(横)・みわたして(保高三尾氏光)

④ 2〜3※×けしきある(古④保高飯池氏光〔横肖桃〕〔河〕―け△きある(陽)・気しきあり(阿)・気しきある(国三日)・氣色ある(穂)

④ 4〜5●◎すこしひきとらせ(古保国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕―ひきとらせ(④陽)

④ 5◎おほしくて(古国高阿三穂飯池日氏光〔横肖〕〔河〕―おほして(④陽保〔桃〕)↓大成・陽に異同記載ナシ  
④ 9▲△ひとりこち給を(古陽保国高阿三穂池日〔横肖桃〕尾〔御七平大伏岩〕―ひとり給を(④)・ひとり給を(鳳)・ひとりこち給てを(氏)・ひとりこちたまふを(飯光)

〈二丁ウラ〉〔大成一七六四9〜14〕別本集成 497722〜497757〕

⑤ 3◎いさゝかの(古国高阿三飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕―いさゝか(⑤陽保穂)

⑤ 4●◎たてまつれたまへれば(古穂光〔横肖桃〕〔御七平鳳大岩〕―たてまつれば(⑤陽)・たてまつれたまへり

ければ(保)・たてまつられ給<sup>せられ</sup>ければ(三)・たてまつらせたまへれば(伏)・たてまつらせ給へれば(池)・  
たてまつれ給へれば(国高尾日)・奉れ給へれば(阿飯)・たてますれ給<sup>ま</sup>れば(氏)

⑤7⑧●◎むつかしきこともこそと(古国高穂飯日氏光〔横肖桃〕〔河〕)―むつかしきこともそと(陽)・むつかしき事もそと(⑤)・むつかしきすゝるなることもこそと(保)・むつかしき事もこそと(阿)・むつかしき事もこそと(三池)

⑤8※◎くるしくおほせと(古国高阿三飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕)―くるしうおほせと(⑤陽穂)・おほすにくるしけれど(保)・

⑤8⑨●◎とりかくさんやは(古阿飯池氏光〔横肖桃〕〔御七平鳳伏岩〕)―とりかくすへきことかは(⑤)・ゝりかくすへき事かは(陽)・とりかくさむやは(高三日)・ゝりかくさむやは(保国尾穂)・かくさんやは(大<sup>十と</sup>二丁オモテ)〔大成一七六四14〜一七六五5/別本集成497757〜497800〕

⑥1×なに事か(古⑥阿三穂飯池〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕)―なにこ△<sup>(虫掛)</sup>かは(陽)・なにとか(氏)・なにとか(尾(朱)・なにごと<sup>十</sup>か(保国高日)・何事か(光)↓大成・陽「なにごと<sup>十</sup>かは」

⑥1※◎おはしますらむ(古三飯池日光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕)―おはしますらん(⑥陽保尾穂氏)・をはしますらん(国高)

⑥2※×山さとに(古⑥保高阿三穂飯池氏光〔河〕)―山△<sup>(虫掛)</sup>とに(陽)・山里に(国)・やまさとに(日)↓大成・陽に異同記載ナシ

⑥3▲△御ものかたりも(古保高池日〔横肖桃〕〔河〕)―御物かたりとも(⑥)・ものかたりも(穂)・御物語も(阿飯光)・御物かたりも(陽国阿三氏)

⑥ 4 ※◎かしのしん殿 (古国阿穂飯池光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) — かのみやのしんてん (保) ・ かの宮のしんてん (三) ・ かしこの新殿 (高) ・ かしこのしむてん (⑥陽氏) ・ かしこのしんてん (尾) ・ かしこのしむ殿 (目)

⑥ 6 ▼×ほかにうつすことも (古⑥保国高飯池日〔横肖桃〕〔河〕) — ほかにうつすとも (陽) ・ ほかさまにもうつす事は (阿) ・ ほかにもうつすことも (氏) ・ ほかにうつす事 (伏) ・ ほかにもうつす事も (三) ・ ほかにうつすへき<sup>§</sup>ことも (光) ・ ほかにうつす事も (穂)

⑥ 7 ▲△ものしはへらめ (古陽国高阿三〔御七平鳳大伏岩〕) — ものし給侍らめ (⑥) ・ しはへらめ (保) ・ のし侍らめ (光) ・ ものし侍らめ (陽尾日) ・ のしはへらめ (氏) ・ 物しはへらめ (穂) ・ 物し侍らめ (飯)

⑥ 8 ▲△おほせ事はつかはせなとそ (古穂飯池日氏〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) — おほせ事はつかはせなとそ (⑥) ・ おほせことはおほせつかはせなとそ (国) ・ おほせ事はおほせつかはせなとそ (高) ・ 事はおほせつかはせとそ (阿) ・ おほせことはつかはせなと (陽保三尾) ・ おほせことはつかはせなとそ (光)

⑥ 10 ※△きゝつらむと (古陽三〔横肖桃〕〔御七平大伏岩〕) — きゝつ覽と (⑥) ・ きゝたらんと (保) ・ きゝつらんと (国高尾穂飯池日氏光) ・ 聞つらんと (阿) ・ きゝつらんと (鳳) ↓ 鳳「十との給もすこしはけにさやありつらん」

⑥ 10 ▼×の給も (古⑥国高阿穂飯池氏〔横肖桃〕尾〔御七平大伏岩〕) — の給にも (陽) ・ のたまふからうして (保) ・ のたまふも (三光日) ・ ナシ<sup>十の給も</sup> (鳳)

⑥ 10 丁ウラ) 〔大成一七六五〕9 / 別本集成 497801 ~ 497845)

⑥ 10 ~ ⑦ 1 ●◎けにさや (古国高阿三穂池日氏光〔横肖桃〕尾〔御平大伏岩〕) — けにさもや (⑦陽) ・ けにさも

(七)・けにや(飯)・ナシ(保)・ナシ十けにさや(鳳)

⑦2※△あなかちに(古陽保国高三飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕―あなか△かに(⑦)・あ△△&ナかちに(穂)・こよな  
くあなかちに(阿)

⑦3(▼)×うちゑんして(古国高三池日氏〔横肖桃〕〔河〕―ゑんして(陽)・ゑして(保)・うちえんして(⑦)  
阿穂飯光 ↓※大成・保「ゑんして」

⑦5▼×かへりことかき給へ(古氏〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―御返事ニかき給へ(陽)・かへり事はきこえ給へ  
(穂)・かへりことかいたまへかし(保)・返事書給へ(⑦)・返事かい給へ(三三)・返事かき給へ(高阿)・返  
ことかきたまへ(光)・返ことかき給へ(国)・かへり事かき給へ(尾飯池日)

⑦6●◎ほかさまに(古陽保国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕―ほかさまへ(⑦陽)・ナシ(保)

⑦6●◎むき給へり(古国高阿飯池日〔横肖〕尾〔御七平鳳大伏岩〕―みむき給へり(⑦陽)・そむきたまへは  
(保)・そむきたまへり(桃)・そむき給へり(三三)・むきたまへり(尾穂氏光)

⑦6く7※×かゝさらむも(古⑦高三日〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―かくさんも(阿)・かゝさらんも(陽尾穂  
飯池氏光)

⑦9◎さやにてこそ(古氏〔横桃〕尾〔御平〕―さやうにてこそ(⑦陽保国高阿三穂飯池日〔肖〕〔七大伏岩〕・  
さやにてこそ(光)・さやニにてこそ(鳳)

⑦10※×もとめん(古⑦保国阿三穂飯池日氏〔横肖桃〕尾〔御七平鳳大伏〕―もとめむ(陽高光)・ナシ(岩) ↓  
岩「もとめんよりはあらしはつましく思ひ侍をいか」ナシ

〈三丁オモテ〉〔大成一七六五9く14／別本集成497845く497885〕

- ⑧2●◎思ひ侍を(古「横肖桃」〔御七平鳳大伏〕—思給を(日)・思侍しを(⑧)・おもひはへりしを(陽)・思侍るを(飯)・侍るを(阿)・おもひはへるを(保尾)・思侍を(国高池)・思はへるを(穂)・思ひ侍るを(三光)・思ひはへるを(氏)・ナシ(岩)
- ⑧4◎おろかならすなんと(古保「横肖桃」〔河〕—おろかならすなんと(⑧陽阿)・をろかならすなんと(穂光)・をろかならすなんと(国飯池日氏)・おろかならすなむと(高)・をろかならすなむと(三)
- ⑧6※×我御心ならひに(古国高阿三穂池氏光「横肖桃」尾〔御七平鳳大伏岩〕—我心ならひ(大)・我をん心ならひに(陽)・我か御心ならひに(⑧)・わか御心ならひに(保三飯日)
- ⑧8◎ことにて(古池氏「横肖」尾〔御平鳳大伏岩〕—うとき(⑧)・ことに(陽保高国三桃七穂飯日光)
- ⑧8●◎てをさしいて(古保国高)―さしいて、(⑧陽)・手をさし出して(阿)・てをさしいて、(穂氏日「横肖桃」〔河〕)・をさしいて、(池)・てをさしいて(光)・てをさし出て(飯)・手をさし出て(三)
- ⑧8◎まねくか(古保国高阿三穂飯池日光「横肖桃」〔河〕—まねく(⑧陽氏)
- ⑧10●◎玉のを(古国阿三「横肖桃」〔御七平鳳大伏岩〕—たまを(⑧陽)―たまのを(保高尾穂飯池日氏光)〔三丁ウラ〕〔大成一七六五14〕〔一七六六5〕別本集成 497885～497924〕
- ⑨2く3◎あはれなる比なりかし(古国「御七平鳳大伏岩」—あはれなりかし(⑨陽桃穂飯池日〔伏〕)・あはれなりし(肖)・あはれなるころなりかし(横)・あはれなるころなりかし(光)・あはれなる比なるへし(阿)・あはれなるころなりかし(保高尾氏)
- ⑨4▲△もの思ふらし(古飯「御七平鳳大伏岩」—物をおもふと(⑨)・ものおもふらし(陽保尾氏光)・物おもふらし(国高三穂)・物思ふらし(阿)・もの思らし(池日)



- ⑨ 6◎御そとにも(古国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―御そとにも(⑨陽保・ナシ〔尾〕↓  
尾「十ほどの御そとにもなおしは」
- ⑨ 6↷7▼×なおしはかり(古⑨保阿三池日〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―なをしはかりなど(陽)・なをしはか  
りを(国高)・かり十なをしは(尾)なをしはかり(穂飯氏光)
- ⑨ 7●◎ひ前末はわを(古)―ひわ(⑨)・ひは(陽)・比巴を(飯)・ひわを(保高三穂池日氏光〔横肖桃〕〔河〕・  
ひはを(国阿)
- ⑨ 7△ひきみる給へり(古阿三飯池日〔横肖桃〕〔河〕―ひき給へり(⑨国高)・ひき十給へり(穂)・ひきみたまへり  
(陽氏光)
- ⑨ 10※×ものえんしも(古高池光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―えゑしも(保)・ものゑしも(陽氏)・物えんし  
も(⑨阿)・物ゑんしも(国三飯)・ものゑんしも(尾穂日)・ナシ(絵)
- ⑨ 10※△えしはてたまはず(古池〔横肖桃〕尾〔御平鳳大岩〕―えし給はず(⑨)・はてす(保)・ゑしはてす  
(絵)・えし給はず(阿)・しはて給はず(国高七)・えしいて給はず(穂伏)・えしはて給はず(陽三飯日氏光)
- 〔四丁オモテ〕〔大成一七六六五↷10/別本集成497924↷497961〕
- ⑩ 1※○みき丁の(古池氏〔横肖桃〕尾〔御七平鳳伏岩〕絵)―御木丁の(光)・み丁の(大)・御几帳の(⑩飯)・  
御木丁の(陽国高阿)・み木丁の(保三)・御き丁の(日)・御きちやうの(穂)
- ⑩ 5×しれ(古⑩保国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕)―みれ(陽保絵)
- ⑩ 7※△はつかしければ(古陽保国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕)―はつかしすけければ(⑩)
- ⑩ 8◎御心のうちも(古)―人のうちも(飯)・心のうちも(⑩陽国高阿池氏光〔横肖〕)・こゝろのうちも(絵日

〔御七平鳳大伏岩〕・心中も〔保〕・こゝろ§ § §こゝろのうちも〔尾〕・こゝろのうち§ § §の〔保桃〕・心のうちの〔三〕  
 ⑩9●◎をしはからるれと〔古国高三穂池氏〔横肖桃〕尾〔御七平鳳大岩〕〕―をしはからる〔⑩陽〕・をしはからるれは〔飯〕・おしはからるゝ§れは〔阿〕・をほしやらるれと〔絵〕・をしはかるれと〔伏〕・おしはからるれと〔保日光〕

⑩9▲▼○かゝるにこそ〔古阿三絵穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕〕―かゝるそは〔⑩〕・かゝれはこそは〔陽〕・かゝるにつけてこそは〔保〕・かゝれはこそ〔国高〕

⑩10◎うたかはしきか〔古三〔桃〕〕―うたかはしきかた〔⑩陽保国高阿飯池日光〔横肖〕〔河〕〕・うたかはしき方〔穂〕・うたかはしきかたゝ〔絵〕・うたてかはしきかた〔氏〕

〔四丁ウラ〕〔大成一七六六10〕14／別本集成497962～498001

⑩2◎よく〔古飯〕―よくも〔⑩陽保国高阿三穂池日氏〔横肖桃〕〔河〕〕・よへも〔光〕

⑩4●◎なかゝ〔古保飯池氏〔横肖桃〕〔河〕〕―またいと〔⑩陽〕・中々〔国高阿三〕・中ゝ〔穂日光〕

⑩4ゝ5※×ひとともにか〔古⑩高池日〔横肖桃〕尾〔御七平鳳大伏〕〕―人もともにか〔陽〕・ひとにか〔保〕・一もとにか〔国阿三飯〕・一本にか〔穂〕・本上にか〔光〕・ひとけにか〔氏〕・ひとともにか〔岩〕

⑩5※◎あらむ前は〔古〕―あらん〔⑩陽保国阿穂飯池日氏〕・あらむ〔高三光〔横肖桃〕〔河〕〕

⑩6●◎とりわきて〔古保国阿三飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕〕―とりわき〔⑩陽〕・ナ上シ〔高〕

⑩7※◎すし〔古保阿飯池日光〔横肖桃〕尾〔御平鳳大伏岩〕〕―すんし〔⑩陽高穂氏〕・すむし〔国三七〕

⑩8◎花〔古阿三〔肖桃〕〕―このはな〔⑩保池日〔横〕尾〔七平鳳大伏岩〕〕・この花〔陽国高穂光〕・此花〔飯〕・はな上〔御〕・この〔氏〕

⑪10 ▲▼○手をしへけるは(古三「横肖桃」〔御平鳳大伏岩〕)てをしへたるは(陽)・てをしらへたるは(⑪)・てをしらへけるは(尾)・てをしらへけるは(国高)・手をしへけるに(七)・しらへをしへけるは(阿)・ておしへけるは(光)・てをしへけるは(保穂飯池日氏)

〈五丁オモテ〉〔大成一七六六14〜一七六七4／別本集成498000〜498038〕

⑫2 ●◎さしをき(古国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕)をしやり(⑫陽)・さしおき(保)

⑫4 ▲△つたへたらむ(古高三池日「横肖桃」〔七平大伏岩〕)つたへかたらん(⑫)・へたてならん(鳳「な↓たカ」)つたへたらん(陽保国阿尾穂飯氏)つたえたらん(光)

⑫5 ▲△おほつかなき(古陽国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕)おほつかなき(⑫)・またおほつかなき(保)

⑫7 ～8 ●◎さしいらへ(古保国高阿三穂飯池日光〔肖桃〕〔河〕)さしらへ(⑫陽↓⑫「さし」〔行末〕下欄外墨汚れあり)・さしいて(横)・ナシ(氏)↓※氏「十ひとりことはさうくしきにさしいらへし給へかし」

⑫8 ～9 ◎さうの御こと(古保国高三飯池日氏〔横肖桃〕尾〔御七平鳳大伏〕)さうのこと(⑫陽穂岩)・さうのこと(光)・さうの御琴(阿)

⑫9 ◎とりよせさせて(古三池日光〔横肖桃〕〔河〕)とりよせて(⑫陽国高阿穂氏)・とりよせて(飯)・ナシ(保)

〈五丁ウラ〉〔大成一七六七4～9／別本集成498038～498080〕

⑬2 ●◎なりにしものをとつましけにて(古高池日氏〔肖〕〔河〕)なりにし物をとて(⑫陽)・なりにしものをとていとつましけに(保)・なりにし物をとつましけに(三)・なりにしものをとつましけにて(桃)・なりにしものをとつましけにて(横)・なりにし物をとつましけにて(国阿穂飯)・成にしものを

とつゝましけにて (光)

⑬ 4 5 〇 わたり (古) | わたりは (⑬陽保国高阿三穂飯池日光〔横肖〕〔河〕・あたりは (三〔桃〕)・はたりは (氏) <sup>§</sup>わ

⑬ 6 ▼ × かたなりなる (古⑬保国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) | かたほなる (陽)

⑬ 6 ▲ △ うみことをも (古陽保国高阿飯池日光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) | ことをも (⑬)・うみことを (穂)・

うみ事を (氏)・うひことをも (三)・うみ事を (尾)

⑬ 7 8 〇 心うつくしきなん (古陽国高阿穂飯池光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏〕) | 心うつきしきか (⑬陽)・心う

つしき (岩)・こゝろうつくしきならん (氏)・こゝろうつくしきなむ (三)・心うつくしきなむ (日)・こゝ

ろうつくしきなん (保尾)

⑬ 8 9 ▲ ▼ 〇 其中納言も (古〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏〕) | この中納言も (⑬)・こかの<sup>(ママ)</sup>中納言も (陽)・かの中

納言も (保)・中納言も (穂岩)・その中納言も (国高阿三尾飯日)・<sup>(モ)</sup>の中納言も (池氏光)

⑬ 9 〇 さたむめりしか (古国高三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) | さたむめれ (⑬陽保)・さたむなんめりしか (阿)

⑬ 9 ● 〇 はたかくも (古国高阿飯池日氏光〔横肖桃〕尾〔七平鳳大伏岩〕) | はた (⑬陽)・よにかうも (保)・はた

かたくも (御)・はたかく (穂)・はたかうも (三)

⑬ 9 10 ▲ △ つゝみ給はし (古国高阿三穂飯池日氏〔横肖桃〕〔河〕) | つゝみ給て (⑬)・つゝみたまふし<sup>§</sup> (陽)・

つゝみたまはし (保光) ↓ 別本集成・陽にミセケチ訂正記載ナシ

⑬ 10 ● 〇 御中なめれはなと (古国高三穂飯池日氏〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) | 中なめれはなと (⑬陽)・御なか

なめれは (保)・御中なめれはと (阿)・御中なんめれはなと (光)・御なかなめれはなと (尾)

〔六丁オモテ〕〔大成一七六七9〕14／別本集成 498080～498116〕〔丁子吹き料紙〕

⑭2 ▲△しらへ〔古陽保国高阿三穗飯日氏光〔横肖桃〕尾〔御平鳳大伏岩〕〕—しらせ⑭・して⑭・して⑭・して⑭・しらめ  
(池)

⑭3 ◎はんしきてうにあはせ給〔古国三穗飯池日氏〔横肖桃〕〕—はんしきてうにて⑭〔平鳳大伏岩〕・はむしき  
てうにて(陽)・はんしきてうに(御七)・盤渉調に(阿)・はんしきてうにあはせ給(尾)・はむしきてう  
にあはせ給(高)・はんしきてうにあはせたまふ(光)

⑭3 ●◎かきあはせなと〔古国高阿三穗飯池日氏光〔横肖桃〕〕〔河〕—かきあはせ⑭(陽)・かきあはせなといと  
(保) ↓大成・阿「かきあはせ」、陽に異同記載ナシ

⑭4 ◎けおかしけに(古) —をかしく⑭(陽〔桃〕)・おかしう(保)・をかしう(三)・おかしけに(国高阿飯池日  
光〔横肖〕〔御七平鳳大伏岩〕)・をかしけに(尾穗氏)

⑭4 ※△いせのうみ〔古陽保高阿三穗池氏〔横肖桃〕〕〔河〕—伊勢の⑭⑭⑭・伊勢のうみ(国日)・伊せのうみ  
(光)・伊勢の海(飯)

⑭5 5く6 ◎女はうも(古) —女はら⑭(穗日)・をんなはら(陽)・おんなはら(御七伏)・女はら(飯池〔肖〕)・  
女はらの(桃)・女はらも(光)・女はらも(国高横)・おんなはらも(尾〔平鳳大岩〕)・をむなはらも(氏)・  
女房とも(阿)・女はう(三)

⑭6 6く7 (●) ◎多みひろこりて〔古国高阿三氏光〔横肖桃〕〕〔河〕—多みひろけて⑭(陽保)・多みひろこり(穗  
飯池日) ↓別本集成・保「多みひろけてき」とあるが、「き」は次文節「あたり」の異同と扱う

⑭7 ◎ふた心〔古保国高阿三穗池日氏光〔横肖桃〕尾〔御七平鳳大伏〕〕—ふた所⑭⑭⑭・ふたところ(陽保岩)・二

心(飯)

⑭9●◎なをわか(古三種飯日氏「横肖桃」〔河〕—我(⑭陽)・猶わか(保阿池)・なを我(国高光)

⑭10◎御ありさまに(古国高三種飯池日氏「横肖桃」〔河〕—御あたりに(⑭陽保)・御有さまに(阿光)

〈六丁ウラ〉「大成一七六七14〜一七七八5/別本集成498116〜498158」(丁子吹き料紙)

⑮2△所の(古国高阿氏「横」〔御七平鳳大伏岩〕—年ころの(⑮)・としころの(保三種飯池日〔肖桃〕・所<sup>すところ</sup>の(光)・ところの(陽尾)

⑮3◎おほして(古国高阿三種飯池日氏「横肖桃」〔河〕—おほし(⑮陽保)

⑮5▼×御こととも(古国阿三種池日氏光「横肖桃」〔河〕—御ことも(陽)・御こと(保)・御事とも(⑮)・御こととも(高飯)

⑮6(●)◎三四日(古保国高阿三種飯池日氏光「肖桃」〔河〕—三日(⑮陽)・三四日<sup>十二</sup>(横)

⑮9▼×いて給ける(古⑮国高三種飯池日氏「横肖桃」〔河〕—いてさせ給ける(陽)・いてたまふける(光)・出給ける(阿)・いてたまひける(保)

〈七丁オモテ〉「大成一七七八5〜9/別本集成498158〜498203」(丁子吹き料紙)

⑮11〜2(▲)△いましつるそとよと(古陽国高穂飯池日氏光「横肖桃」〔河〕—いましつるそと(⑮)・いましつるそと<sup>十</sup>(三)・いますらんと(保)・いまするそと(阿)↓大成・七「いましつるそとよと」

⑮2〜3●◎わたり給て(古高阿穂飯池日氏「横肖」〔河〕—わたりて(⑮陽)・たまひて(保)・いて給て(三)・わたり出給て(桃)・わたり給へて(国)・いら<sup>す</sup>たまひて(光)

⑮3※×たいめんし(古⑮高穂池日氏「横肖桃」尾〔御七平大伏岩〕—たいめむし(陽国)・たいめし(光保阿三

飯屋

⑩ 5く6◎ものかたりとも (古) — 御物かたり (16陽)・御ものかたり (保)・御物かたりなど (三)・御物かたりとも (国尾穂飯氏光)・御ものかたりとも (高池日)〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩)〕

⑩ 8※◎かんたちちめ (古国高池氏)〔横肖桃〕〔河)〕 — かむたちちめ (16陽保三日光)・上達部 (阿穂飯)〔七丁ウラ)〕〔大成一七六八9く14/別本集成498204く498243〕〔丁子吹き料紙)〕

⑩ 4◎いつれとなく (古穂飯池日)〔横肖)〕 — いつれともなく (17陽保国高阿三氏光)〔桃)〕〔河)〕

⑩ 5▼(※) ×御こともの (古保阿池日)〔横肖)〕尾〔御七平大伏岩)〕 — 御ことものに (氏)・御ことへの (陽)・御こと (桃)・御ことんの (17)・御子とももの (国高三穂飯光)・ナシ (鳳) ↓鳳「十御こともの」御さまにてわきと」 ↓大成・陽「御こと」の」

⑩ 6●◎なかりけり (古保国高阿三穂飯池日氏光)〔横肖桃)〕〔河)〕 — なかりける (17陽)〕

⑩ 7※△やむことなけなる (古陽保高穂氏尾)〔御七平大伏)〕 — やむ事なけなる (池)・やことなけなる (光)・やむことなきなる (17横岩)・ナシ (鳳)・やんことなけなる (国阿三飯)・やむ事なけなる (日) やむ事なけなる

⑩ 8◎むかへに (古国高伏穂飯池日氏光)〔横肖)〕 — 御むかへに (17陽保阿三)〔桃)〕〔七平鳳大岩)〕・むかへに (尾) 御

⑩ 9※△にくけれ (古陽保国高阿三穂飯池日氏光)〔横肖桃)〕〔河)〕 — くけれ (17) に

⑩ 2※△たちまじるへくも (古陽保国高阿三穂飯池日光)〔横肖桃)〕〔河)〕 — まじるへくも (18)・立まじるへくも (阿)・たちまじるへきくも (氏) たち

⑩ 3※△かすかなる (古陽保国高阿三穂飯池日氏光)〔横肖桃)〕〔河)〕 — かすかなる (18) か

⑬3 ●◎身のおほえをと(古国高阿三穗池日氏光〔横肖桃〕尾〔七平鳳大伏岩〕―物をと(⑬)・ものをと(陽)・身のおほえをも(御)・みのおほえと(保)・みのおほえをと(飯)

⑬4 ●◎こもりゐなんのみこそ(古保阿飯池氏〔肖桃〕〔河〕―こもりなんのみこそ(⑬陽)・こもりゐなんのみそ(国)・こもりゐなむのみそ(高穗)・こもりゐなんのこそ(横)・こもりゐなんのみこそ(光)・こもりゐなむのみこそ(三日)

⑬5 ▲△いとゝおほえ給(古陽国高阿三穗池氏光〔横肖桃〕〔河〕―いとおもふ給(⑬)・おほえ給(飯日)・いとゝおほえたまふ(保)

⑬7 ※△また(古陽保国高阿三穗飯池日氏光〔河〕―又(⑬)

⑬8 ※◎いかならむと(古高三日光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―いかならんと(⑬陽保国阿尾穗飯池氏)

⑬9 (▼)○所々にて(古国阿三氏〔横桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―所々にてもこゝにても(⑬)・こゝろゝにても(陽)・こゝろゝにてもこゝにても(保)・「こゝろゝにても」ト補記・所々にても(飯)・所々にても(池日〔肖〕)・こゝろゝにても(尾)・「とゝろゝにても」ト補記・所々にても(光)・所々にても(穗)・ところゝにても(高)↓大成【河内本】・河内本集成に異同記載ナシ、大成・保「ゝ(ト)ころゝにてもこゝにても」

⑬10 ◎又々(古国阿三〔河〕―又(⑬陽)・また(穗)・ナシ(保)・またゝ(高光)・又ゝ(飯池日氏〔横肖桃〕)

〈八丁ウラ〉〔大成一七六九五〜9／別本集成 498286〜498322〕

⑬11 ※◎いといたく(古国高阿穗飯池日光〔横肖桃〕―いといたう(⑬陽保三氏尾〔七平鳳大伏岩〕)・いといたつ



ら(御) ↓穂「いとてかく」と判読可

①9 1〜2 ※○きさいの宮よりも(古)国高三池光〔横肖桃〕〔御七平鳳伏岩) —きさきの宮よりも(①9陽阿)・きさいのみやよりも(保尾日)・きさきの宮よりも(大)・きいのみやよりも(氏)・后宮よりも(穂)・後の宮よりも(飯)

①9 3 ×なりぬれと(古)①9国高三飯池日氏〔横肖桃〕尾〔御平鳳大伏岩) —なりぬれは(陽七)・なりぬれとことに

(保)・なれと(穂)・成給ぬれと(阿)・成ぬれと(光)

①9 4〜5 ※△ものくしく十も朱(古) —物くしくても(①9)・ものくしうもおほえたまはぬ(保)・ありさまを

(阿)・ものくしく(七)・物々しくも(三)・ものくしくも(陽)国高穂飯池日氏光〔横肖桃〕尾〔御平鳳大伏岩)

①9 5〜6 ●○きこえ給はさりつるを(古)国高阿三穂池日氏光〔横肖桃〕〔河) —きこえさりつるを(①9)・きこえさ

りつるを(陽)・ナシ(保)・聞え給はさりつるを(飯)

①9 6〜7 (▼) ○いつこにもく(古) —いつくにもきこしめしをとろきて御とふらひとも(陽)・いつこにもいつ

こにもきこしめしおとろきて御とふらひとも(池)・いつくにもくきこしめしおとろきて御とふらひとも(①9穂光)・いつくもくきこしめしおとろきて御とふらひとも(阿)・いつこにもくきこしめしをとろきて

御とふらひとも(保)〔桃)・いつこにもくきこしめしおとろきて御とふらひとも(国高三飯日氏)〔河)・いつこにもくきこしめしおとろきて御訪とも(横肖)

①9 7〜8 ●○聞え給ける(古) —人もきこえける(①9)・人もきこへける(陽)・きこえたまひける(保)〔御七平鳳

大伏岩)・きこえ給ひける(飯)・きこえ給ける(国高阿三尾穂池日氏光)〔横肖桃)

⑱ 8〜9 ◎おほしきはくに (古国高阿穗飯池日氏「横肖」〔河〕) — おほしきはくにも (⑱陽) ・ おほしはわくにも (光) ・ おほすらんにも (保) ・ おほしきはくらんにも (三桃)

⑱ 9 ●◎いかにをはせんと (古保国阿三光「横肖桃」〔御七平鳳大伏岩〕) — いかにせんと (⑱陽) ・ いかにおもはせんと (氏) ・ いかにおもはせんと (尾) ・ いかにおはせむと (高日) ・ いかにおはせんと (穗飯池)

⑱ 9〜10 ▼ (※) ×心くるしく (古国高阿穗飯池日氏光「横肖桃」〔河〕) — くるしう (陽) ・ 心くるしう (⑱) ・ いとゆるしくあはれに (保)

⑱ 10 ※×うしろめたく (古⑱国高阿三穗飯池日氏光「横肖桃」尾〔御七平鳳大岩〕) — うしろめたう (陽伏) ・ うしろめたけれと (保)

〈九丁オモテ〉〔大成一七六九9〜一七七〇1／別本集成498322〜498364〕

⑳ 2 ◎えまかてたまはて (古) — えまうてたまはて (⑳陽保三〔大岩〕) ・ えまうて給はて (穗飯) ・ えまうてき給はす (国高) ・ えまうて給はず (阿桃) ・ えまて給はて (肖) ・ えまてたまはて (池〔横〕尾〔御七平鳳伏〕) ・ えまて給はて (光日) ・ ナ ナクまでたまはて シ (氏) ↓ 氏 ナめれあまりもくまでたまはてしひてそ 「御いのりなとも」

⑳ 2 ◎しのひてそ (古国高阿三穗飯池日氏光「横肖桃」尾〔御平鳳大伏岩〕) — しのひて (⑳陽保) ・ 忍て (七) ・ しのひて△ (光) ・ ナ ナしひてそ シ (氏) ↓ 大成・陽に異同記載ナシ

⑳ 3 ●◎御いのりなとも (古三穗飯池日氏光「横肖桃」〔河〕) — 御いのりとも (⑳陽) ・ 御いのりともをそ (保) ・ 御いのりなと (国高阿)

⑳ 3 ▲▼○さるは女二の宮の (古保国高三穗飯「横肖桃」尾〔御七平鳳伏〕) — 女宮の (⑳) ・ 女二宮の (陽) ・ さるは二宮の (氏) ・ さるは女二宮の (阿光池日〔大岩〕)

- ②4 ⑤ ●◎ひゝきいとなみのゝしる (古国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕―ひゝきのゝしる  
 (②)・ひひきのゝしる (陽)・ひゝきていとなみのゝしる (保)・ひひきいとなみのゝしる (尾)
- ②5 ●◎みかとの (古保国高阿三飯池日〔横肖桃〕〔河〕―たゝみかとの (②陽)・御みかとの (穂氏)・御門の  
 (光)
- ②6 ●◎おほしいそけは (古国高阿氏穂飯池日光〔横肖桃〕〔河〕―おほしいそきて (②陽)・おほしめしいそけは  
 (保三)
- ②7 ▲▼○なきしもそ (古保国高阿三穂池日氏光〔横肖〕〔河〕―なきしもこそ (②)・なにしもそ (陽)・なきし  
 も (飯)・なきにしもそ (桃) ↓大成・陽に異同記載ナシ
- ②9 ▲▼○つくも所 (古国高穂飯池日光〔横肖桃〕〔御七平鳳伏岩〕―つくもところさく所 (②)・つくもところさ  
 へ所 (陽)・つくもところ多ところ (保)・つくもところ (阿三尾氏)・つくる所 (大↓るヲ削ツテもヲ書クカ)  
 (②10) ●◎※◎するうともなど (古〔横肖桃〕尾〔御七平鳳大伏岩〕―す両ともなど (②陽)・するうとも (保)・  
 しゆりやうともなど (国高)・すりやうともなど (阿氏光〔七〕)・すりやうともなむ (三)・すらうともなど  
 (飯池日)・受領ともなど (穂)
- ②10 (●) ※◎つかうまつる (古阿三穂飯池日氏〔横肖桃〕〔河〕―つかまつる (②陽)・ナシ (保)・つかふまつ  
 る (国高光)
- 〈九丁ウラ〉〔大成一七七〇1〕6 / 別本集成 498365 ~ 498418)
- ②1 ▼×ことゝも (古②国穂池日光〔横肖桃〕〔河〕―ことゝも (陽)・なにこともつかうまつりける (保)・事とも  
 (高阿三飯)・ことゝも (尾氏)

- ②1 ① かきりなしや (古国高氏光〔河〕) — かきりなし (②陽阿三種飯池日〔横肖桃〕・ナシ〔保〕)
- ②2 ② まいりそめ給へき (古国高阿三種池日氏光〔横肖桃〕尾〔御七平大伏岩〕) — まいり給へき (②) ・まいりたまふへき (陽保) ・まいり給へき (鳳) ・参りそめ給へき (飯)
- ②2 ③ おとこかたも (古国高阿三種池日光〔横肖桃〕〔河〕) — おとこかたにも (②) ・をとこかたにも (陽保) ・をとこかたも (氏)
- ②3 ④ ×比なれと (古阿〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) — 心なれと (陽) ・ころなれと (②) 歩国高三尾種飯池日氏光
- ②4 ⑤ ×いらて (古②保国高阿三種飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — いらて (陽)
- ②5 ⑥ ※△なげかる (古陽保国高阿種飯池日光〔横肖桃〕〔河〕) — なげかるへ (②) ↓「へ」左に「ミ」・右に「ヒ」と二種のミセケチ↓行文「きさらき」と続く) ・おほしなげかる (三〔桃〕) ・なげなる (氏)
- ②6 ⑦ ×なおしものとか (古保高池日〔横肖桃〕尾〔御七平大伏岩〕) — なをし物とかや (陽) ・なをしのことか (鳳) ・なをしものとか (氏) ・なをし物とか (②国阿三種) ・なをしものとか (飯光)
- ②7 ⑧ △右大将 (古国阿三種飯池日氏光〔横肖桃〕尾〔御七平鳳伏岩〕) — 左大将 (②保大) ・うたいしやう (高)
- ②7 ⑨ ×かけ給つ (古②国高阿三種池日〔肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) — かけ給 (陽穗) ・かけたまへ (保) ・かけたまへつ (横) ・かけたまひつ (尾) ・かけたまひつ (氏光)
- ②7 ⑩ ○右のおほいとの (古飯氏〔横肖桃〕尾〔御七平鳳伏岩〕) — 右大将の (陽) ・左のおほい殿 (大) ・故大い殿 (穗) ・右大殿、(②) ・右のおほいとの、(保) ・右のおほい殿の (国) ・右のおほ殿の (高) ・右の大い殿 (阿) ・右のおほい殿 (三) ・右の大殿 (池) ・右大いとの (目) ・右大臣殿 (光)
- ②8 ⑪ ◎ひたりにておはしけるか (古飯氏〔横肖桃〕〔河〕) — ひたりになり給て (②陽) ・左におはしけるを (保) ・

左にておはしましければ(阿)・左にておはしけるか(三国高光池日)・左にてをはしけるか(穗)

②18 ●◎しゝ給へる(古国高飯池氏〔横肖桃〕〔河〕)―かへ給へる(②1)・かへたまへる(陽)・しゝたまひける

(保)・しゝ給ける(三)・しゝたまひる(光)・しし給へる(阿)・しゝたまへる(日)・辞し給へる(穗)

②19 ※△ありき給て(古陽国高阿三穗飯池日氏〔横肖桃〕〔河〕)―あり給て(②1)・ありきたまひて(保光)

②10 ※◎くるしく(古国高阿穗飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕)―くるしう(②1陽保三)

〈一〇丁オモテ〉〔大成一七七〇6〕11/別本集成498419～498462〕

②21 1～2 ▲▼〇程なりければ(古国高三〔横肖桃〕〔河〕)―ほとに成けり(②2)・程なりけり(陽)・ほとなり(氏)・

ほとにてこなたにおはしませは(保↓前後の行文を含めた異同)・なりければ(阿)・ほとなりければ(穗飯

池日光)

②24 ●◎御なをし御したかさねなど(古国高阿三池日氏光〔横肖桃〕尾〔御平鳳大伏岩〕)―御なをしなど(②2陽)・

御なをし(保)・御なをししたかさねなど(七)・御なをし御下かさねなど(穗飯)

②25 ●◎ひきつくろひて給て(古)―かへてひきつくろひて(②2陽)・ひきつくろひて(保穗桃)・ひきつくろひ

給て(国高阿三飯池日氏〔横肖〕〔河〕)・ひきつくろひたまひて(光)

②25 ▲△おりて(古高阿飯池日〔横肖桃〕尾〔御七平鳳伏岩〕)―おもて(②2)・たうおりて(大)・をりて(陽保国

三穗氏光)

②25 5～6 ●◎たうのはいし給(古国穗池日氏〔横肖桃〕〔御七平鳳大岩〕)―たふのはいし給へる(②2陽)・ふたうの

はいし給(伏)・たてのはいし給(飯)・たふのはいし給(高阿)・たふのはいしたまふ(保尾)・たうのは

いしたまふ(三光)

②⑦○いとめてたく〔古飯池日氏光〔横肖〕尾〔平鳳大伏岩〕―めてたし〔陽保三桃〕・いとめてたし〔②②国高阿〔御七〕〕・めてたく〔穂〕

②⑦◎やかて〔古国高阿三氏〔横〕尾〔御平鳳大伏〕〕―やかてこよひ〔②②陽保七岩穂池日〔肖桃〕〕・やかて今夜〔飯〕・やかて〔光〕

②⑦◎つかさの〔古保国高阿三氏〔横〕尾〔御平鳳大伏岩〕〕―官の人に〔②②〕・つかさの人に〔陽七穂飯池日〔肖桃〕〕・官の〔光〕

②⑧▲▼○あるしの所にと〔古阿三穂池日氏光〔横肖桃〕〕〔御七平鳳大伏〕―はるところに〔陽〕・あるところ〔飯〕

②⑨⑩◎おほしたゆたひ給める〔古国高三飯池日〔横肖桃〕〕〔御平鳳大伏岩〕―おほしたゆたふめる〔②②陽〕・おほしたゆたふ〔保〕・おほしたゆたひける〔阿〕・おほしたゆみ給める〔七七〕・おほしたゆたひまふめる〔光〕・おほしたゆたひたまふめる〔尾穂氏〕

②⑩◎右大臣殿の〔古国高阿池〔横〕〕〔七平鳳伏〕―左大臣殿の〔陽大氏〔肖〕〕・左大臣殿②・左のおほい殿の〔桃〕・左のおほいと右の、〔三〕・左大臣の〔飯〕・右大臣殿右の〔岩〕・左大臣殿右の〔尾〕・右大臣との〔御〕・右大臣殿右・〔穂光〕・右大臣との、〔目〕・みきの大との、〔保〕

①①〇丁ウラ〕〔大成一七七〇11～一七七12／別本集成498463～498501〕

②③1▲△ま上にとて〔古陽保国高阿穂飯池日三光〔横肖桃〕〕〔御七平鳳大伏〕―ま上にて〔②③〕・ま上とて〔岩〕・ま上に〔尾〕・ま上に〔氏〕

②2 ▲▼○ 多んかのみこたち (古保国高阿三穂飯池日光〔横肖桃〕尾〔御七平鳳大岩〕) — みこたち (陽) ・ 多ゝかの  
みこたち (②3) ・ 多むかの宮こたち (穂) ・ 多むかのみこたち (氏) ・ 多んかの御こたち (伏)

②3 ※△ かんたちちめ (古陽保国高池日氏〔横肖桃〕〔河〕) — かむたちちめ (②3 三光) ・ 上達部 (阿飯) ・ 上遊部 (穂)

②2 2 3 ※× たいきやうに (古②3 阿池日氏光〔横肖桃〕尾〔平鳳大伏岩〕) — たいきやう (御七) ・ 大経に (陽) ・ 大  
饗に (保三穂飯) ・ 大きやうに (国高)

②3 3 4 ●◎ さはかしきまてなん (古阿飯池氏〔横肖桃〕〔河〕) — もとかしきまてなん (②3 陽) ・ もとかしきまて  
(保) ・ さはかしきまて (日) ・ さはかしきまてなむ (国高三穂) ・ さわかしきまてなむ (光)

②3 5 ●◎ なければまた事はてぬに (古〔横肖桃〕〔御平鳳大伏岩〕) — なければ (②3 陽) ・ なけれどまた事はてぬに  
(阿) ・ なければまたこともはてぬに (七) ・ なきければまたことはてぬに (飯) ・ なければまた事はてぬ  
に (高) ・ なければまたことはてぬに (保国三尾穂池日氏光)

②3 7 ※△ の給 (古陽国高阿三穂飯池日〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) — 給<sup>+</sup> (②3) ・ みたまふ (保) ・ のたまふ (三尾  
氏光)

②3 7 ▲△ をとるへくも (古陽阿穂〔横肖桃〕〔御七平鳳大伏岩〕) — おとるへう (②3) ・ おとるへうも (保) ・ をとる  
へうも (三) ・ おとるへくも (国高尾飯池日氏光)

②3 8 ▲△ たゝいまの (古陽国高穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — たゝいま (②3) ・ たゝいまのよの (保) ・ たゝ今の  
(阿三)

②3 9 ※△ もてなし (古陽保国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕) — てなし<sup>+</sup> (②3)

〈一丁オモテ〉〔大成一七七一二〜七〕別本集成 498501 ~ 498543〕

- ②4 1〜2 ●◎むまれ給へるを(古国高阿穂池日〔横肖桃〕〔御七平鳳大岩〕)―むまれ給へりけるを(②4陽)・むまれ給へる(三)・うまれたまへるを(保)・うまれ給へるを(伏)・生れ給へるを(飯)・むまれたまへるを(尾氏光)
- ②2 ●◎いとかひありて(古国高穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕)―かひありて(②4陽)・いとかなしくて返々もかひ有て(阿)・いとかひあるさまに(保)・いとかひあるさまにて(三)
- ②2 △うれしく(古陽国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕)―ナシ(②4保)
- ②2 2〜3 ▲▼○大将殿もよろこひにそへてうれしくおほす(古高穂飯池日氏光〔横肖〕〔河〕)―大将殿も(②4)・大将はも(陽)・ナシ(阿)・大将もよろこひにそへてうれしとおほす(保)・大将もよろこひにそへてうれしくおほす(三〔桃〕)・大しやう殿もよろこひにそへてうれしくおほす(国)
- ②4 8 ◎五日のよ(古〔桃〕)―五日のよは(②4陽保高阿池日尾鳳大伏岩)・五日の夜は(国阿三穂飯〔横肖〕〔御七平〕)・五日よは(氏)・五日夜は(光)
- ②4 8 9 ×大将殿より(古②4保氏国高阿穂飯池日〔横肖桃〕〔河〕)―大将により(陽)・大殿より(伏)・大将とのより(光)
- ②4 9 ●○としき(古高阿穂飯池日〔横肖桃〕尾〔御七平伏鳳大岩〕)―とき(②4陽)・としき(保三)・ともしき(氏)・とむしき(国光)
- ②4 9 ▲▼○五十く五てのせに(古日氏光〔肖桃〕〔河〕)―五十くかゆこすの<sup>へ</sup>とに(陽)・五十くかゆての<sup>こ</sup>ことに(②4) ↓「くえかゆらての<sup>こ</sup>ことに」とも判読可)・卅九<sup>く</sup>ての<sup>せ</sup>に(保)・五十く五<sup>く</sup>の<sup>せ</sup>に(横)・五十具五<sup>て</sup>の<sup>せ</sup>に(国高飯池)・五十具<sup>こ</sup>ての<sup>せ</sup>に(阿穂)・五十く<sup>こ</sup>ての<sup>せ</sup>に(三)



〈二丁ウラ〉〔大成一七七一〜七二〕別本集成 498543〜498580〕

25 1◎三十〔古保三飯光〔横肖桃〕〔河〕〕—廿〔25陽阿〕・卅〔国高池日氏〕

25 2 (▲) △いつへかさねにて〔古陽国高三飯池日氏〔横肖桃〕〔岩〕〕—いつへかさねて〔25〕・五へかさねにて〔穂〕・いつかさねつゝ〔保〕・いつかさねにて〔尾〔御平鳳大伏〕〕・五かさねにて〔阿〕・五重にて〔七〕・五へかさねにて〔光〕

25 2●◎御むつきなとそ〔古国高阿三穂飯池光〔横肖桃〕〔伏〕〕—御むつきなとこそ〔25陽〕・よのつねのことに〔保〕・おほんしつきなとそ〔氏〕・おほんむつきなとそ〔尾〔御七鳳大岩〕〕・おほむつきなとそ〔日〕

25 3●◎ことくしからすしのひやかに〔古国高三穂池日氏光〔横肖桃〕〔河〕〕—ことくしからす〔15陽〕・ナシ〔保〕・ことくしからす忍ひやかに〔飯〕・ことくしからす忍やかに〔阿〕

25 3×こまかに〔古25国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕尾〔七平鳳大伏岩〕〕—こまかやに〔陽保〕・こまちかに〔御〕

25 5 (●) ※◎せんかうの〔古国阿飯池日氏光〔河〕〕—せんかうの〔25陽〕・せんかうの〔保〕・せむかうの〔高三穂〕

25 7▲▼○女はうの御まへには〔古〔横肖桃〕〔御七平鳳伏〕〕—女かたの中には〔25〕・女かたには〔陽〕・女房に〔保〕・女の御前には〔国高〕・女方の御まへには〔尾〕・女かたの御前には〔光〕・女房の御前には〔飯〕・女房の御まへには〔阿三穂池氏〕・女はうのおまへには〔大岩〕・ねうはうの御まへには〔日〕

25 7●◎つかさねをは〔古国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕〕—つかさねは〔25陽〕・つかさね〔保〕

25 9●◎あり〔古国高阿三穂飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕〕—おほかり〔25陽〕・ナシ〔保〕

25 9●◎人めに〔古保国高阿三穂飯池日〔横肖桃〕〔河〕〕—ひとめ〔25〕・人め〔陽〕・人〔氏〕・人めには〔光〕

②5 9〜●10 ◎ことくしくは (古保国高阿三種飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕——こと<sup>§</sup>ことしくはと (②5)・ことくしくはと (陽))

②5 10〜②6 1 ▲▼○しなし給はず (古国高阿三種飯池日氏光〔横肖桃〕〔河〕——しなし給はぬなりけり (②5)・しるし給はぬなりけり (陽)・したまはず (保))

〈二二丁オモテ〉〔大成一七七二12〜一七七二2／別本集成498581〜498617〕

②6 4 ●◎殿上人かむたちめ (古三日光〔横肖桃〕〔河〕——かむたちめ殿上人 (②6)・かんたちめ殿上人 (陽)・大とのきみたちさらぬかんたちめ天上人も (保)・殿上人上遊部 (穂)・殿上人上達部 (国高阿飯)・殿上人かんたちめ (池氏))

②6 5 ▲▼○まいり給へり (古国高阿三種飯池日氏〔横肖桃〕〔河〕——<sup>(マヤ)</sup>たらちあそひのしる (②6)↓「たうち」とも判読可)・あそひのしる (陽)・まいり給えり (穂)・まいりたまへり (保氏光))

②6 7 ◎いかてかと (古三種飯池日氏光〔横肖〕〔河〕——いかてかはと (②6陽国高〔桃〕)・ナシ (保)・いかてかはと (阿))

②6 8 ▼×たてまつらせ給へり (古②6国高穂飯池氏〔横肖〕〔河〕——たてまいらせ給へり (陽)・たてまつれたまへり (保)・たてまつれ給へり (三〔桃〕)・たてまつり<sup>ホト</sup>給えり (光)・奉り給へり (阿))

②6 8〜9 ※◎おほい殿より (古三〔横肖桃〕〔河〕——大殿より (②6陽国高穂)・大ゐ殿 (阿)・ナシ (保)・大臣とのより (光)・大い殿より (飯池氏)・大いとのより (日))

②6 9 ▼(※) ×つかうまつらせたまへり (古阿〔横桃〕〔御七平鳳大伏岩〕——つかまいらせ給へり (陽)・つかまつらせ給へり (②6)・ナシ (保)・つかふまつらせ給 (国高)・つかうまつらせ給<sup>§</sup>へる (肖)・つかうまつらせ

給えり(穗)・つかうまつらせ給へり(氏)・つかうまつらせ給へり(三尾飯池日)・つかふまつらせたまへり(光)

〈二丁ウラ〉〔大成一七七二2〜7／別本集成498618〜498658〕

②1※△きんたちなど(古陽国池氏「横肖桃」)「御七平鳳大伏岩」―きむたちなど(②7三尾日)・ナシ(保)・きんたち(光)・君たちなど(高阿穗飯)

②5◎おほしたりつるに(古保国高阿三穗氏「横肖」)「河」―おほしわたりつるに(②7陽飯池日「桃」)・おほした<sup>た</sup>りつるに(光)

②77〜8(▲)※△なくさきもや(古陽保国高阿三穗飯池日氏光「横肖桃」)「河」―なくさきもや(②7)

②78※◎し給らむ(古日「横肖桃」)「御七平鳳大伏岩」―し給らん(②7陽国高阿池)・したまふらん(保尾穗氏光)

②710※○けとをくやならむ(古高三飯日光「横肖桃」)「御七平鳳大伏岩」―けとをくやあらん(穗)・けとをくやならん(②7保阿池氏)・けとほくやならん(陽尾)・氣とをくやならん(国)

本稿では、特異な異同のみに着目するのではなく、異同全体(今回は丁子吹き料紙本・陽明文庫本の関係に絞って)の把握を目的としたが、目指すところは異同様態の可視化にあり、数値化はあくまでもその補助的役割を担うものすぎない。それを踏まえて、異同状況を整理しておく。

◎ 105

○ 19

△ 22

※◎ 15

※○ 2

※△ 19

× 26 [内、(※) × 3を含む] ※ × 10

となる。※のない数値がほぼ異同の実数値と考えてよく、丁子吹き料紙本・陽明文庫本のいずれかに異同が存する計172箇所内、両本の異同が一致する箇所は105箇所(六一・二%)に及ぶ。△や×はどちらかの本が犯した単純な書写ミスと思われるものが大半を占めるが、両本に異同が認められる◎○については別の理由が想定されよう。この数値に、独自共通異文・独自異文を示す記号を重ねてみると(括弧を付したものは、他本の訂正以前或いは訂正後の本文に抵触するものや音便に関連するものなどを示す)、

● 60 (●) 6

▲ 14

▲ 16 (▲) 3 [※△1]

▼ 16 [○1、(※) × 2] 3 [○2]

となる。丁子吹き料紙本・陽明文庫本のみが共通する異同●は、両本に共通する異同◎105箇所中60箇所(五七・一%、全体の三四・九%)に及ぶ。これに両本の異同は共通しない(○)が、どちらも独自異文となっている14箇所(▲▼)を加えると74箇所(全体の四三%)となる。各本の独自異文の数値は各々の▲・▼に▲▼を加えた数値となり、丁子吹き料紙本30箇所(○△41中七三・二%、全体の一七・四%)、陽明文庫本30箇所(○×45中六六・七%、全体の一七・四%)となる。他本から独立して両本に共通する異同の数値は、各本の独自異文に倍しており、たとえその異同に誤写などを成因と考えられるものが含まれるとしても、この二本の間に何らかの書承関係が存在することを明瞭に示すものである。一方で各々に存在する独自異文の存在は、両本が直接の書写関係にないことを示すものであるが、両本ともに誤写や脱字などのケアレミスが多く、この数値はそれを反映したもので、少しく割り引いて見てお

く必要がある。

少し具体的に見ておくと、●の内、本文の脱落や誤写が原因とは考えにくい例としては、②9「思のほかこそ」（諸本「心よりほかにそ」）・⑤8〜9「とりかくすへきことかは」（諸本「とりかくさんやは」）・⑦6「みむき給へり」（諸本「むき給へり」）「そむきたまえり」等）・⑪4「またいと」（諸本「なか〜」）・⑫2「をしやり」（諸本「さしをき」）・⑬3「物をと」（諸本「身のおほえをと」等）・⑳5「たゝみかとの」（諸本「みかとの」）・㉑8「ひたりになり給て」（諸本「ひたりにておはしけるか」）・㉒5「かへてひきつくろひて」（諸本「ひきつくろひ給て」等）・㉔1〜2「むまれ給へりけるを」（諸本「むまれ給へるを」）・㉔9「とき」（諸本「とんしき」）・㉕9「おほかり」（諸本「あり」といったものが挙げられる。こうした諸本にない表現が付加されたり、まったく別の表現となっているものが共通することは、両本が同一の系統に属することを示す明確な事例となる。

そのほかの事例は、概ね一〜二字程度の小異や少し大きめの脱落の存在を示すものであるが、これらもそれが他本から独立して存在する以上は、両者の書承関係を保証する事例となろう。少しく例示しておくくと、②8「御そなども」（諸本「ひとへの御そなども」・保「御そなども」）、④4〜5「ひきとらせ」（諸本「すこしひきとらせ」）、⑤4「たてまつれば」（諸本「たてまつれたまへれば」等）、⑧8「さしいてゝ」（諸本「てをさしいて」等）、⑬2「なりにし物をとて」（諸本「なりにしものをとつゝましけにて」等）、⑬6「ことをも」（諸本「うぬことをも」）、⑬9「はた」（諸本「はたかくも」等）、⑳4「御なをしなと」（諸本「御なをし御したかさねなど」・保「御なをし」）、㉑5「なければ」（諸本「なければもた事はてぬに」）、㉑3「こと〜しからす」（諸本「こと〜しからすしのひやかに」・保「しなしたまへれと」）などが挙げられるが、このような誤脱を疑われる箇所的一致からは、やはり何らかの書承関係が想定されざるを得ない。また、(●)とした異同(※◎)の中には、⑳10「す両ともなど」（諸本「すろうともなど」）「しゆり

やうともなど」等)といった例も見られ、このような諸本から独立した宛字の共通などは、かなり近い書承関係を想定させる事例と言えよう(通常は異同としてはカウントされないものを、※を付して敢えて残したのは、こうした書承関係の想定される事例を排除しないためである)。

たゞし、△(▲)または×(▼)とした例の中には、△②3「かなしくて」(諸本「わりなくて」)、×⑬6陽「かたほなる」(諸本「かたなりなる」といった誤写とは見做せないかなり特異な異文が片方にのみ認められる事例もある)ので、両者の直接の親本は、想定される共通の祖本からは少しく距離があることも事実であろう。

▲▼とした両本ともに別々の独自異文をもつ箇所を見ていくと、⑳9「つくもところさく所」／陽「つくもところさへ所」(諸本「つくも所」→「作物所」)では保坂本に「つくもところ多ところ」という独自異文があり、こうした別本の中での本文の揺れが影響したものと思われる。㉔8「あるとしろに」／陽「はるところに」(諸本「あるしの所に」等)→「饗の所に」(あるし)、㉔9「五十くかゆてのことに」／「五十くかゆこすのに」(諸本「五十く五てのせに」等)→「屯食」五十具、碁手の銭」といった例は、おそらくその共通祖本の段階で読み≡意味把握が不安定となり行文が乱れた(意味を把握できずに字形のみを模写した)結果生じた異文と理解されるが、これも双方の親本の段階ですでに少し乖離が認められる事例となろう。㉔5「たらあそひのゝしる」／陽「あそひのゝしる」(諸本「まいり給へり」といった例も、諸本からまったく離れた異同となっているが、一部は共通しており、その淵源する祖本がかなり特異な異文を有したものであったことが推定される)。

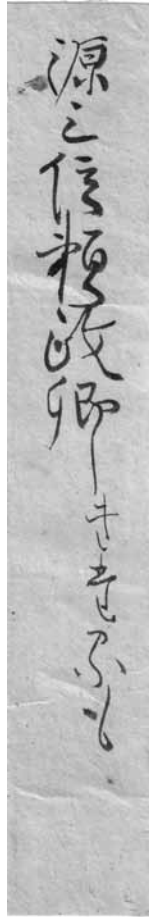
各本の独自異文(▲・▼)については、概ね誤写や脱字によるものであり、特に零本部分に多く認められると、もに、ある程度集中する傾向が見てとれる(文字を落として補入することも多くなる)。これはおそらく、古筆切断簡が「宿木」の比較的前半部分であったのに対して、零本は後半部分にさしかゝっており、長編である「宿木」を書写する

際に丁子吹き料紙本・陽明文庫本の両筆書者ともに集中力が続かなかったことが原因と考えられる（丁子吹き料紙本「宿木」に認められる補訂箇所は、㉔5「なけかるへ（↓「へ」左に「さ」・右に「ヒ」）」に認められる二重のミセケチの内、右の「ヒ」とあるものを除いて、すべて本文と同筆であり、ほとんど他本との接触＝校合がなされていなかったことが窺われる）。

以上を通覧すれば、この丁子吹き料紙本「宿木」が陽明文庫本と極めて近い（同一の祖本を持つ）関係にあることは容易に理解できよう。もし丁子吹き料紙本の存在がなければ、陽明文庫本は、今回の調査範囲だけでも60+14+16＝90箇所の独自異文を持つことになる（「宿木」全体では、その約十倍の数値が予想される）。「宿木」に限ってみても陽明文庫本と保坂本の独自異文の量は突出しており（たゞし両本には書承関係を予想させるほどの一致はなく、別系統の別本と言わざるを得えないが）、このような特殊な伝本を校異本文の底本として用いることには、少しく抵抗があることも事実であろう。異同の総体的＝相対的把握という点では、むしろもつとも流通している本文を軸とした方が、はるかに直感的に理解がし易いはずである。にもかゝらず「別本集成」で陽明文庫本が底本として用いられた理由には、三十九帖の別本群の内、その根幹をなす鎌倉中期書写の三十四帖の存在がある<sup>㉔</sup>。しかし、「別本集成統」において、非河内本＝別本という括りに認識を移行した際にも、大島本や明融本ではなく陽明文庫本に固執したことの是非は、問われねばなるまい（本稿で敢えて煩を侵して大島本を底本として異同を掲出したのは、扱う対象が特殊な別本であることを照射し易くするためであり、加えて河内本との距離も見易くするための措置である）。

それはともかくとして、そのような孤立的な存在であった陽明文庫本に、やゝ遠い（伝本研究上では、非常に近い）親戚であるこの丁子吹き料紙本が加わったことの意義は極めて大きい<sup>㉔</sup>。陽明文庫本のように同一系統の伝本をほかに持たない単独本では、その独自異文が親本や祖本に由来するものか、それとも単なる不注意に起因するものかを峻別

することは極めて困難であったが、少なくとも丁子吹き料紙本との比較が可能な部分においては、ある程度それが可能となると考えられる（少なくとも共通する異同は祖本に由来するものであり、それ以外の異同とは分けて考えることができる）。すなわち、同じく鎌倉中期書写の両本を用いることによって、その元となった祖本への遡行が見通せることになる。少なくとも鎌倉初期、もしかすると平安末期頃の本文の面影が、この両本を比較して用いることによって見えてくるかも知れないという期待を抱かせるという意味でも、丁子吹き料紙本の存在は、別本中の別本たる陽明文庫本の存在価値を一層高めることに役立つものと言えよう。更なる僚巻やツレの断簡の発見が切に望まれる所以である。



極札

〈注〉

- (1) 書誌の記述方針については、拙稿「冰青藏品図録・古筆切編——私撰集(二)——」(『女子大國文』第百六十九号、令和二 2021 年九月)・「冰青居藏品図録・古筆切編——歌合(一)——」(『女子大國文』第百七十号、令和四 2022 年一月) 参照。
- (2) 前稿「冰青居藏品図録・古筆切編——歌合(二)——」(前掲注(1))「1、伝宗尊親王筆十卷本歌合切(長保五年五月十五日 左大臣道長家歌合)」と同じ紙箱で、表具も基本的には同じような仕立となっており、入手元も同じである。
- (3) 本軸の寸法 (cm) は、総丈(一一〇。〇×二四・八)。風帯(三三・五×一・〇)、一文字(上三・五、下二・一×二二・五、中



- 廻し(五九・〇、柱一・二、上一・七、下七・二)、上下(上三三・五、下一七・五)。台紙(四四・四×三二・五)、「内縁覆輪までの寸法」左右一・八、上一二・六、下九・五、内縁覆輪幅〇・三、内縁左一・三、右一・四、上三・一、下二・二、本紙覆輪幅〇・二。軸先(長・左三・〇、右二・八、径二・五)。
- (4) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(伊井春樹編『本文研究 考証・情報・資料 第6集』(和泉書院、平成十六(2004)年五月)所収)、「阿仏尼」(3)《別本》参照。
- (5) 池田龜鑑編著『源氏物語大成』第六冊・校異篇(中央公論社、昭和六十(1985)年三月普及版初版)に依る。
- (6) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第十三卷「早蕨(宿木) (おうふう、平成十三(2001)年十月)に依る。
- (7) 上野英二「ハーバード大学美術館蔵源氏物語須磨巻・蜻蛉巻について(乾)——付 翻刻須磨巻——」(『成城國文學論集』第二十五輯、平成九(1997)年三月)、伊藤鉄也編『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「須磨」(新典社、平成二五(2013)年十月)所収の影印及び「解説」に依る。
- (8) 田中重太郎編著『源氏物語断簡』(東風社、昭和三十九(1964)年十月)「解説・釈文」の「書誌」(以下、相愛大学春曙文庫蔵「橋姫」「宿木」「手習」も同書に依る)、柿谷雄三「春曙文庫蔵源氏物語断簡(別本) うちのうらば翻刻」(『相愛国文』第九号、平成八(1996)年三月)に依る。「断簡」「殘簡」と呼称されるが、各々おそろしく一括り分(橋姫)は二一括り分弱)がそのまゝ、残存している現状を尊重して、零本とした。
- (9) 池田利夫『源氏物語の文献学的研究序説』(笠間叢書<sup>22</sup>、笠間書院、昭和六十三(1988)年十二月)第四章「中山家本源氏物語の諸伝本」、館蔵史料編集会(代表・虎尾俊哉)『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』文学篇・第十七卷「物語二」(臨川書店、平成十二(2000)年三月)所収の影印及び「解題」(伊井春樹)に依る。
- (10) 久保木秀夫『源氏物語』巻別本「研究の可能性——石水博物館蔵「早蕨」丁子吹き装飾料紙一帖の紹介を兼ねて——」(中古文学会関西西部会編『源氏物語 本文研究の可能性』(和泉書院、令和二(2020)年三月)所収)に依る。
- (11) 小松茂美『古筆学大成』第二十三卷「物語 物語注釈一」(講談社、平成四(1992)年六月)。

- (12) 『鶴見大学蔵貴重書展解説図録 古典籍と古筆切』（鶴見大学、平成六〔1994〕年十月）82チ「源氏物語断簡 宿木 別本（伝藤原為家筆）」（図録解説・高田信敬担当部分）に依る。
- (13) 上野英二「ハーバード大学美術館蔵源氏物語須磨巻・蜻蛉巻について（坤）——付 翻刻蜻蛉巻——」（『成城國文學論集』第二十六輯、平成十一〔1999〕年三月）、大内英範「源氏物語 鎌倉期本文の研究」（おうふう、平成二十二〔2010〕年五月）第一部「鎌倉期諸寫本とその多様な本文」第三章「ハーバード大学美術館蔵本蜻蛉巻とその本文」、伊藤欽也編『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』『蜻蛉』』（新典社、平成二十六〔2014〕年六月）所収の影印及び「解説」に依る。
- (14) 以上、久保木氏前掲論文（注〔10〕）に依る。
- (15) その伝存状況を勘案すれば、同一体裁で別本系統とされる「ははきぎ」も丁子吹き料紙本の僚巻である可能性は十分に考えられる。ほかにも一面十行で縦横十六cm内外の素紙の六半切で鎌倉中期頃の書写と見られる別本系統の本文を持つ断簡には注意を払う必要がある（今後、丁子吹き料紙部分が発見されれば、これらもツレとして認定され得る）。
- (16) 伊井春樹・高田信敬編『古筆切提要——複製手鑑索引——』（淡交社、昭和五十九〔1984〕年一月）所収の影印に依る。以下、同本の引用はすべて同書に依る。
- (17) 図版113は個人蔵古筆手鑑、図版114は青蓮院旧蔵古筆手鑑「もしの関」所収。一面十行書、極札・寸法等不記載、河内本（同書〔前掲注〔11〕〕「解題」に依る）。
- (18) 「源三位頼政」（未詳極札）、一五・四×五・三cm、一面三行書、流布本系統（久曾伸昇編『源氏物語断簡集成』（汲古書院、平成十二〔2000〕年十二月）に依る）。
- (19) 陽明文庫本「宿木」は、「甲類の表紙を持つ一群三十五帖に属」し、「問題のある絵合一帖、検討を要する若紫・橋姫・東屋・浮舟・手習六帖の計七帖を除いた二十八帖の基幹諸帖に属」する別本であり、「筆者目録」にその筆者を「為家」とする（陽明叢書国書篇第十六輯『源氏物語 十四』（思文閣出版、昭和五十七〔1982〕年六月）別冊「源氏物語 十四 翻刻・解説（石田穰 一）」に依る）。

『源氏物語』丁子吹き料紙本「宿木」の性格

(20)

「宿木」の校異に用いた諸本の略号と略称は以下の通り。この内、「伏」は「別本集成」では「宿木」の対校には用いられておらず、「河内本集成」に「吉」とされる吉田本がこれに該当するが、「別本集成続」既刊分には「伏」として掲げられるので、本文異同としては「河内本集成」を用い、略号は「伏」に統一しておく。「穂」は日本古典文学影印叢刊7『源氏物語(五)』(古典文学会編、貴重本刊行会、昭和五十五年1980年二月)所収の穂久邇文庫本(「宿木」は伝二条為定筆、鎌倉末期写)影印、「飯」は池田和臣編『飯島本 源氏物語』第九卷(笠間書院、平成二十一年2009年十月)所収の影印、「池」は新天理図書館善本叢書第21卷『源氏物語池田本 九』(八木書店、平成三十三年2021年二月)所収(「宿木」は基幹卷「甲筆」・鎌倉時代写)の影印に依る。「大成」に略号「三」とする三条西家本(日本大学現蔵)は、「別本集成」に宮内庁書陵部蔵三条西家本を「三」とするので、略号を「日」と改め、『日本大学蔵源氏物語』第九卷「三条西家証本 九」(八木書店、平成八1996年一月)所収の影印に依った。「氏」は東海大学蔵桃園文庫影印叢書第七卷『源氏物語(宿木卷)・源氏物語系図』(東海大学出版会、平成三1991年八月)所収の伝二条為氏筆鎌倉末期写本、「光」は『日本大学蔵 源氏物語』第十三卷「鎌倉期諸本集二」(八木書店、平成八1996年九月)所収の伝後光厳院筆鎌倉後期写本の影印に依る(両本は定家本系統とされるが、「大成」「別本集成」に未収録であり、鎌倉期の書写にかゝる「宿木」単独本ということを重視して対校本に加えた)。なお、陽明文庫本は「別本集成」所収の翻刻本文に依ったが、大島本との間に異同が存するのに「大成」に異同記載がない箇所については、陽明叢書国書篇第十六輯『源氏物語 十四』(前掲注(19))所収の影印により確認した。

古 大島本(古代学協会蔵)

陽 陽明文庫本(陽明文庫蔵)

保 保坂本(東京国立博物館蔵)

国 国冬本(天理図書館蔵)

高 高松宮本(高松宮家蔵)

阿 阿里莫本(天理図書館蔵)

- 三 三条西家本（宮内庁書陵部蔵）  
尾 尾州家河内本（名古屋蓬左文庫蔵）  
繪 源氏物語繪卷詞書（徳川黎明会蔵）  
〔以上は、「別本集成」に依る〕
- 御 各筆源氏（東山御文庫蔵）  
七 七毫源氏（東山御文庫蔵）  
平 平瀬本（文化庁蔵）  
鳳 鳳来寺本（愛知県新城市鳳来寺伝来）  
大 大島河内本（中京大学図書館蔵）  
伏 伏見天皇本（古典文庫）↓吉田本  
岩 岩国吉川家本（吉川史料館蔵）  
〔以上は、「河内本集成」に依る〕
- 穂 穂久邇文庫本（穂久邇文庫蔵）  
飯 飯島本（春敬記念書道文庫蔵）  
池 池田本（天理図書館蔵）  
日 日大三条西家本（日本大学蔵）  
氏 伝為氏筆本（東海大学桃園文庫蔵「宿木」）  
光 伝後光厳院筆本（日本大学蔵「宿木」）  
〔以下は、「大成」に依る〕
- 横 横山本（横山敬次郎氏旧蔵↓所在不明）

肖 肖柏本（天理図書館蔵）

桃 桃園文庫本（実践女子大学山岸文庫蔵）

(21) 使用する校異符号は以下の通り（以下、本稿ではすべてこれを使用）。

||（傍書） +（補入） \$（ミセケチ） &（なぞり） △（不明）

(22) 加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』（風間書房、平成十三年二月）に依る。

(23) 同本については、裏写りが激しく、複製本のコピーでは本文の正確な読み取りが困難なため、「海外へいあんふんかく情報」に

『源氏物語』原本データベース」([https://genjiito.org/update/genjigenpon\\_database](https://genjiito.org/update/genjigenpon_database))として公開される画像に依った。

(24) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第一巻「桐壺く夕顔」（桜楓社、平成元年1989年三月）「凡例」には「陽明文庫の別本（三十九帖）は高い評価がなされており、現存する別本諸本を対校するにあたっての底本にふさわしいものである」とされ、陽明文庫本に「別本を欠く巻々には、他の別本を用いることで対処した」旨が述べられている。続編では源氏物語本文の研究の進展に深化（「別本集成」の刊行自体がこれに圧倒的に寄与したことは間違いない）に合わせて、非河内本に別本という認識を立脚点として、所謂「青表紙本」系統の陽明文庫本十五帖も合わせて底本として用いられており（源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第一巻「桐壺く夕顔」[おうふう、平成十七年五月]「凡例」参照）、少なくともこの十五帖に関しては、正編と続編ではその見えてくる異同状況の風景はかなり変化せざるを得ないのも事実であろう（たゞし主要な別本〔定家本系統を除く非河内本〕は正編で概ね扱われているので、むしろ続編内でのこの十五帖と、別本である陽明文庫本を底本として用いたそのほかの帖との異同状況の方が少しく距離が大きき「無論、異同そのものは変わるはずはなく、あくまで見た目」見え方の問題であるが、異同の直感的な把握という点ではその差は大きい）ものとならざるを得ない。

(25) 加藤洋介「調査研究速報 角屋保存会蔵『源氏物語』写本未摘花巻について」『角屋研究』第17号、平成二十年三月・同「角屋保存会蔵 源氏物語未摘花巻」解題と影印・翻刻」『角屋研究』第18号、平成二十一年二月）に紹介された角屋保存会蔵「未摘花」も陽明文庫本に近い本文を持つ鎌倉中期の古写本であり、丁子吹き料紙本と並んで注目される。

【付記】本稿は、京都女子大学における国文学特殊講義「中世古筆切研究」（令和四 2023 年度後期）第13回講義テキスト（オンライン版）の一部を元にして加筆・成稿したものです。本稿では、学生時代に御講義の末席を穢した田中重太郎先生の旧蔵資料を扱う機会が持てたことを嬉しく思うとともに、謹んでその学恩に深謝致します。なお、資料複写等についてお世話になった京都女子大学図書館アクティブカウンターに、記して感謝致します。

（京都女子大学文学部国文学科非常勤講師）